

老年学の動向

Trends in Gerontology

Stanford University Press, Stanford,
California, 1957 214pp. by Nathan
W. Shock, Ph. D.

橋 覚 勝

著者はベセズダの国立衛生研究所の循環器研究室並びにボルティモア市立病院の老年学研究室の主任である(上記両所へは筆者もかつて訪問したことがあるがともに実にすぐ完備したものであった)。氏は元来心理学者であるが、現在は生理学の領域で研究をつづけているアメリカでの老年学者のハイライトであり、トップクラスでもある(同氏とは日米両国その他で再三再四懇談したことがあり、外国学者としては最も親交の間柄である)。

本書はすでに1956年にその初版を刊行、1957年には再版せられてそれを著者からもらったものだが、現在ではさらに版を重ねているにちがいない。1951年に氏は「老年学並びに老年病学に関する文献集」(A Classified Bibliography of Gerontology and Geriatrics)を編み出したところから、一応その知識で本書をまとめたのであらうと思われる(因みにその後この文献集は二回(1957、1963)増補せられている)。

緒言にもいっているように、本書は専門家よりもむしろこの方面に興味をもつ一般江湖を対象としたもので、主として50年来のアメリカにおける展開を知らせようとしたものであるが、このような驚異的な日新月异の一端をたどる学問は、実は印刷中にその資料はすでに旧聞に属することになってしまふとは、あながち著者ひとりの放言ではない。はたして本書には遺憾ながらわが国の動静につ

書 評

いては一言もふれていないのである。

却説本書の内容を目次に従って摘記すれば次のとおりである。

(一)緒言 (二)人口の老化傾向 (三)雇傭就業と退職の問題 (四)生計支持の問題 (五)保健の問題 (六)住居の問題 (七)老人教育の問題 (八)老人生活に対する地域計画と社会福祉活動 (九)研究の現況(アメリカ) (十)研究機関と課題(欧米) (十一)将来の研究課題と研究体制

緒言(第一章)において、著者は老年学(ゼレントロジー)の定義、領域、目的をのべて次のようにいう。老年学は老化(年をとる)(aging)の現象についての科学的研究である。agingとは厳密にいえば受胎にはじまり死をもって終るのであるが、老年学は、勝義において個人の成熟完成後死期にいたる身心的変化、ならびにそれに影響する諸因子を研究し、さらに彼らの社会生活における人間関係や、余他の生活環境に対する反応について考察する科学であるとす。従ってその研究領域は

- (一) 高年人口の増加に伴って予想される社会経済的諸問題
- (二) 個人における老化の心理学的側面ならびに社会的関係
- (三) 老化の生理学的基礎ならびに病理的变化
- (四) 生物一般における老化の生物学的側面

を包摂するという。かくして老化によって生ずる個人的社会的障害を最小限度にとどめ、老人自身のためさらに社会のために役立つような、健康にして且幸福な生甲斐のある人生を送らせるようにしむけるところに、老年学の究極の目的があるというのである。以上の諸点については異議をほさむ余地はなからうと思う。

第二章ではアメリカにおける人口の年齢構成や平均余命の変動、人口移動を人口統計によって明示し、高年人口の増加、平均余命の延長を予測しているが、さらに心臓疾患や癌に対する大衆の知識が徹底し、その治療が可能になれば、さらに明白に高年者の数が増すにちがいないという。アメリカにおける全労働力からみて、近年高年労働者の数は大いに増加しているが、六十五才以上の人口の急増、健康の増進、さらには生活の困難によって、その就労の問題はますます切実となり、雇傭市場は門前市をなすとともに、就職相談や適職配置はきわめて急を要する問題となりつつあるというのが、第三章での論述である。第四章では、老

人の収入としては現在養老保険金が主で、それに組合の私的な退職年金がプラスされた程度で、より完全な国家の社会保障が必要であることを指摘し、第五章の保健に関しては医療保護、更生(社会)復帰(リハビリテーション)のサービス、公衆衛生上からみた慢性疾患に関する知識の普及、医療保険の問題などを考察している。第六章の住居の問題に関して、健康老人はプライバシーや自立を提供するような住居を好み、地域活動に参加する機会をもつことを要求している。従ってかかる要求にこたえるための住宅計画が提案されねばならぬ。しかし老人の収入はきわめて限定せられているのであるから、当然低廉な住居をもとめるであろうし、また地域内において共同集合居住するよりも分散居住することを要求しているのだから、地域社会の重要な課題として勘案せねばならぬという。第七章では老人教育の問題を取扱っている。老年教育はいわゆる成人教育として、また退職前の準備教育として、さらに極端にいえばすでに小中学校教育の単元として、早期に行うべきことを強調し、特に老人に対しては、新しい技能や経験を獲得することは、彼らの倦怠や無役感を払拭するのに最も効果的であるという。従って新聞、ラジオ、テレビ、映画などのマスコミによって、「老人な望みあり」という感想をうえつけること、さらに一般教育のために老人講座の開設、大学や図書館の開放などは是非とも必要であると語っている。さらに指導者教育の必要性にもふれているのである。第八章の社会福祉活動の問題については、上巻の記述の諸点に対する各州の委員会または連合委員会活動、老人クラブやデーセンター(Day Center)における活動のプログラム、さらに老人自身または老人に対する地域奉仕活動について説いている。

なお以下の教章については、読者の興味を考えまた紙面の都合も考慮してその紹介を割愛するが、以上の考察は当然アメリカを中心とせられたものとはいえ、世界の各国においてもそれぞれの特色を發揮しながら、研究且つ実施せられているところで、決してアメリカだけの独占企業ではない。むしろなお考察の問題としては残されている点も多い。ただわれわれの発表や宣伝の未熟と困難によって、わが国の動向について一言もふれられていないのは遺憾千万であった。とにかく専門家ならぬ一般大衆に対して老年学のものであることを知らしめるには好個の文献であろう。(一九六四、一一、七)

今日のアメリカの高等学校

The American High school Today

a first report to interested citizens
by James B. Conant, ph. D.
McGraw Hall Book Co. inc., N. Y. 1959,
Pp. 140 \$ 2.95

荒井貞雄

著者、コナント博士は、一八九三年マサチューセッツ州に生れ、化学者としてみとめられていた。また、博士は四〇才にして、ハーバート大学の総長になり、二十年間もその職責をつとめた。最近の二回の世界大戦中には、国家的にもはたらいた。一九五三年、駐西独アメリカ大使として、ヨーロッパの実情をつぶさに観た氏が、帰国後、比較教育的識見をもって、カーネギー財団のじうぶんな資金の提供により、二年間にわたり、アメリカの高等学校を研究して出された報告が本書である。コナント博士は、「ドイツと自由」、「現代科学と現代人」、「分割された世界の教育」、「教育と自由」など、多くの著書がある。

本書は、一九五九年三月出版後、アメリカ教育界における十大事件の筆頭にかぞえられ、ながく、アメリカ出版界のベスト・テンの上位をつづけている。

この書は、アメリカの中等教育が、なやんでいる諸問題を分析すると同時に、その解決の方向を示唆するものとして、教育者はもちろん、教育行政にたずさわる人々、教育に関心をもつ数多くの人々に読まれ、識者の間に、アメリカの国家に対するすぐれた貢献だと高く評価されておる。

著者は、まずアメリカの教育はアメリカの国家の発達にそって出来た学校制度の行政機構のもとにあることを指摘し、そこには、全国的に統一された制度が、無いことを説明している。各国の教育委員会は、ほとんど例外なしに、地方の学校の経営にあたって高度の自由をもっている。然し、どの国にも、今日では、特